

<補足説明>

① 武士の成長

平忠常の乱（1028-31）－房総を席卷－天皇の命により源頼信平定

前九年の役（1051-62）－源義家より三浦為道が三浦介を拜命

後三年の役（1083-87）

保元の乱（1156-）－為義没（1167）－平家政権

義朝より解散帰国命令。三浦義澄、上総介広常他 計 17 騎

平治の乱（1159）－義朝没と義平没－頼朝（伊豆）配流

頼朝挙兵（1180）－石橋山挙兵

平家滅亡（1185）－壇ノ浦合戦

奥州平定（1189）－奥州藤原氏滅ぶ

鎌倉幕府（1192）－頼朝征夷大將軍となる

（1199）－頼朝死去（48 歳）

〔（1200）－義澄死去（74 歳）〕

〔（1201）－常胤^{つねたね}死去（82 歳）〕大願成就なるも、心配事は次世代へ任せよう

② 古今東西、近親結婚はタブー視されていた

男性

長兄から順に家を出ていく。新しい生活の場を求め、新しい家族を求めて、繁栄を作っていくことを祈りながら、両親は送り出す。

例 1) 堺屋太一著『世界を創った男 チンギス・ハン』－西へ西へと移動し、新しい草原とオアシスを求め、牧畜と若い男性とグループで行動（軍事訓練も）

例 2) 山口徹著『海的生活誌－半島と島の暮らし』－船を新しく作って送り出す。

女性

嫁ぐ時、入れ墨、歯の部分欠損－夫が死亡し、生地に戻り、再婚せぬよう。

逆に三浦半島は気候温暖で住みやすい。半農半漁が可能で（山里の幸、海の幸）、

海岸線を見れば、島の奥まで川がつながっている。交通、運搬が自由に。

身内の拠点が遠からず、近からず、各家族が独立独歩の生活基盤がある。

身内の一大事では一致団結できる。

③ 三浦義澄（1172－1200）について

③－1

三浦介義明と秩父重綱^{しづな}の娘との結婚で長男（杉本義宗）、二男（義澄）が誕生。
千葉の古豪（長狭一族）は三浦介義宗の突撃に対し、待ち伏せし、義宗に致命傷を負わせ、
義宗の死後、義澄は三浦惣領家として5代三浦介となった。妻は伊豆の伊東祐親^{すけちか}の娘と結婚
し、長男義村（6代千葉介）を授かる。

<背景>

- イ. 保元／平治の乱にて、為義の指示により、三浦義澄、上総介広常と共に計17騎が上洛し、平家打倒を目指したが戦い利にあらず源氏勢は敗北した。
義朝（頼朝の父、母は熱田大宮司の娘）より解散、帰国命令が發せられ、各々17騎が無事帰国できた。その後、源氏に加担した一族は冷遇され、鎌倉党の大庭景親が平家の配下で相模国守護となり、相模に君臨した。
- ロ. 以仁王の乱の際、大番役として、義澄と千葉常胤は上洛していたが、2人は帰国途中、伊豆の頼朝の配所を訪ね、密談した。
- ハ. 頼朝は伊豆で挙兵した。大庭勢（1万騎）と秩父勢（1万騎）が石橋山を包囲したが、無事頼朝は真鶴から脱出し、三浦一族と合流する為、沖に出た。
- ニ. 一方三浦勢（200騎）は台風の為、夜間豪雨のなか酒匂川^{さかづき}を通れず、敗北を知った義澄は急ぎ帰国を指示した。途中、秩父勢（1万騎）が攻めて来た。攻防のなか、多々良三郎（3男）が討死した。戦いのなか、上総介広常の弟（金田頼次）が70騎で戦場にかげ入った。
翌朝一旦休戦したが、衣笠城にもどり体制を整えた。翌日、城の攻防が続き、義澄は決断した。「兵は疲れ、城を捨てて、頼朝と海上での合流を目指す」と。義明も賛同したが、「自分一人城に残る」と。夜間こっそり全員が脱出し、沖の頼朝との合流を待った。風向きと潮の流れから南房総に停泊し、無事合流できた。安房のオジ（安西氏）宅で疲れを取り、策を練った。「先ず長男の仇を取る。そして千葉氏（200騎）と合流する」と。幸いオジの助言を受け、見事長狭一族を潰し、気炎を吐いて士気を高めた。
- ホ. 密談で決めた当初の予定より5日早く、頼朝が挙兵。千葉氏と合流し、上総介の勢力との合流を待つことにした。「目指すは鎌倉」。そして隅田川を挟んで武蔵国へ上陸する体制を整えたが、当面の敵は秩父一族が対陣している。頼朝と千葉と三浦とで、「平家を討つには兵力が削がれる、和解しよう」と話し合った。

③-2 三浦一族と秩父一族との因縁

義澄にとっては、義明（父）と母（秩父氏の娘）は大切な両親であり、なおかつ姉は畠山家へ嫁ぎ、長男（畠山重忠）を出産した母親である。

こんな大切な縁を畠山一族は衣笠城を包囲し、城王の義明を秩父一族と共に惨殺した。まして昨日まで敵対していた集団が簡単に手の平を返す如く、服従し、平然と従属するは許せぬ輩だ、と。

頼朝の求めに「畠山を許してやれ」、打倒平家の一念でしぶしぶ了解した。

鎌倉幕府が創建して、平家の打倒に向け、体制を整えつつあるなか、義澄から頼朝に対して、「伊東祐親を許してやってほしい」と。頼朝は快諾し、「今日の夕方にも会おう」と。

急ぎ使者を伊豆の伊東祐親に伝え、到着を待った。

突然、伊東家の使者より事変の報告があり「一度敵に回ったものが今さら服従するは武士の恥だ」と、長男と共に自害した。義澄の希望は絶たれた。

他方、次々に平家を蹴散らしつつ最後の平家滅亡の時を迎えた。

周防灘にて満ち潮時、平家軍船団が下関の彦島から一気に攻め込んできた。

源氏軍は引き潮（西から東へ）にて弓矢の戦いは不利であったが、苦戦のなか潮の流れが逆流し（東から西へ）、平家軍は弓矢の戦いに不利になった折、壇ノ浦の海岸沿いに三浦一族の弓矢隊が、船の真横から矢の雨を浴びせた。平家船団は敗戦を悟り、海に飛び込み、海底深く沈んだ。陸上の三浦一族と源氏軍船団から、一斉に勝ちどきが鳴り響いた。勝負はついた。ここに平家が滅亡した。

時は流れ、鎌倉幕府も政治の体制が整い、一見平穏な日を迎えた。

突然、二組の集団（北条家と、畠山重忠の長男・重保達と）が下馬付近で小競り合いとなった。共に抜刀の闘いの末、畠山重保が刺殺された。

重忠は事の始末を聞くや、ただちに 100 騎を超える部下と共に鎌倉へ向け急いだ。それを知り北条一族は応戦体制に入った。とその時三浦介（義村）が部下を引き連れ参戦した。両者は二俣川で激突した。特に義村が一門の恨みと、耐えに耐えた父親への思いとで爆発した。眼前の畠山勢を、怒りに任せて片っ端から殺害した。

要は世間の風（畠山は鎌倉入り一番やりだとの自負と、義村や北条泰時のオジ・伊豆の伊東祐親の、武士の恥と自害したことをさすが武士だと）理解できないまま畠山一族は滅亡した。

北条泰時が執権となり、梶原景時を追討、比企一族を謀殺そして和田義盛を挙兵させ秩父一族と三浦の有志を巻き込み、身の丈を判らぬまま北条を攻めたが（三浦介義村には相談なく。また義村も加勢せず）敗死。

鎌倉殿（頼朝）の死後、幕府を支えてきた大黒柱の 2 人が急逝した。

- 1239 三浦義村急死（62 歳）
 - 1242 北条泰時急死（59 歳）
- } ともに脚気かづけによる心臓停止であった

不運にも2人の急逝で北条方は策士であり強気の時頼、三浦方は温和な気弱い泰村が7代目三浦介を継いだ。

1247 宝治合戦となり三浦一族は泰村の提案で、300名を超す主だった者の自害を勧めた。泰村の最後の言葉は「北条を恨むな、三浦一族は巨大な権力を備えたが、その間、他一族を殺し、その遺族を不幸に追いやった。その罪は大きいのも事実である」と。

なお義澄は、官位をすべて辞退して6代目三浦介義村へ渡し、身内の者にも各々官位を受けさせた。頼朝から相模国の守護を強引に命じられ、それのみ受けた。

④ 徳川家康が学んだこと

北条の滅亡後、全国の武士団が天下をねらい、戦国時代に突入した。

徳川家康は闘いの中であって三浦／北条の滅亡について「吾妻鏡」^{あづまがみ}を学んだ。

イ. 「おごれる者、久しからず。ただ春の夜の夢のごとし」と。

「盛者必衰の^{ことわり}理をあらわす」と。

ロ. 皇室／官人の女性を嫁として迎えるな。

ハ. 北条泰時(59)・三浦義村(62)の急死は共に痛風で、若くしての心肺停止は贅沢が主因だ。

ニ. 女性を政治に参加させるな。

以上